親友だってラクじゃない

920P

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友だってラクじゃない

【Ｎコード】

Ｎ０７６４Ｑ

【作者名】

９２０Ｐ

【あらすじ】

湊仁一朗は、恋愛シミュレーションゲーム（対象年齢問わず）を愛してやまない男、春野弘司を親友に持つ高校二年生。ある日起きたら、仁一朗は何故か弘司一番のオススメであるギャルゲーの世界（らしきところ）に飛び込んでいた。そして、弘司がゲームの主人公のポジションに、自分が主人公の親友ポジションにいることを知る。現実と変わらない間柄だが、辺りを取り巻く環境はがらっと変わってしまったこの世界で、仁一朗はどのように生きていくのか。親友ポジションからのラブコメディ。

００１：親友、飛ばされる？

カーテンを閉め切り薄暗くなっている部屋の中で、男二人がパソコンのディスプレイに向き合うというのは果たしてどういう絵面なんだろうか。しかも二人の視線の先には、所謂『二次元の美少女』と呼ばれる女子の立ち絵がある。立ち絵の手前にはウィンドウの下半分を埋めるテキストボックス。そこにいくつかの文章が流れていき、物語の筋を決めるための選択肢が三つ現われる。迷うことなく３を選択。

男二人でギャルゲーです。最悪ですね。

「あ、違うよジン。そこは『お前を待ってた』が正しい選択肢なんだけど」

俺の脇に座り、俺のプレイを逐一監視するのは我が親友――と呼ぶのが最近何だか嫌になってきたような気がする――こと春野弘司（はるの こうじ）だった。趣味は恋愛シミュレーションゲーム（ただし年齢制限問わず）で、二次元の少女が大好きだと公言して憚らない天性のバカでもある。顔は案外悪くないのに、この趣味のせいで女子からの評価は軒並み最低ランクの悲しい男だ。

そして、弘司の横で黙々と――多分画面内で繰り広げられるどうにもこうにもむず痒い台詞の応酬を仏頂面で眺めているはずだ――彼のお薦めのギャルゲー『Ｔｒｕｅ　Ｍｉｎｄ～本当のキモチ～』をプレイしているのが俺、湊仁一朗（みなとじんいちろう）。

弘司は俺がほぼ能面のままにこのゲームをプレイしていることに気がついていないのか、活き活きとした表情であれやこれやと指示を飛ばしてくる。元気なのは良いことだが一発頭をぶん殴ってやりたい衝動に駆られた。俺の精神安定のためにも。

「だああっ！　何でそこでその選択肢なのさ！　咲良（さくら）たんを攻略する気がないの！？」

「ねえよ……。もうこのまま独り身でも良いくらいだよ……」
耳元で叫び声を上げた弘司に、俺は呆れを通り越して諦念の混じる声音で言ってやった。
そもそも俺はこういうゲームに向いていない。全くと言って良いほど向いていない。俺の得意なのはむしろ格ゲーや音ゲーで、こんな風にテキストを読み進めていくだけのゲームをプレイしているのは殆ど苦行に等しいのだ。
「わかってないっ！　ジンはわかってないよッ！　ヒロインを攻略しない主人公なんて存在価値ナシ！」
「俺は主人公になった覚えもないぞー」
「今からでも遅くないから咲良たん狙いで行こう。霧子（きりこ）さん狙いでも悪くないね……いや、待てよ、ここからなら玲（あきら）ルートへも入れるな！　違う、慎重にフラグを立てて灯里（あかり）ちゃんルートにしようか……」
俺の発言は華麗にスルーし、弘司は自分の世界に入り込んでしまった。ヤツの頭の中ではどのヒロインを攻略するべきか必死に演算を行っているのだろうが、その能力を少しくらいは勉学や何かに使ってやる方がよっぽどヤツのためになると思う。一年最後の評定の酷さは俺ですら目を背けたくなるレベルだったからな……。
俺が（珍しく）弘司の心配をしているというのに、当の本人は未だなにやらブツブツと呟いていた。もう何を言っても無駄だろう。
俺は瞳を閉じ、キーボードのＣＴＲＬキーに指を伸ばし――、
「って何してんだよジンんんんんんッ！　邪道、それは邪道だ！　死ぬか、いっぺんここで死ぬかあッ！？」
「いってぇっ！　いきなり殴りかかんじゃねえ、このクソッタレ！」
「クソッタレはお前だ！　テキストスキップとか、ギャルゲーを舐めんな！」
「やりたくもないギャルゲーをやらされてる俺の身にもなりやがれっ！」
「何だとっ！　ギャルゲー史上最高の傑作（僕調べ）である『とう

るまい』を馬鹿にするか！　そんな野郎、修正してやる！」
弘司の対して強くもないパンチが顔に入る。お返しとばかりに、俺はヤツの腹に肘鉄を入れた。弘司の蹴りが脛に入り、そこから後は純粋に乱闘だった。
元からインドア派の弘司が、中学時代は喧嘩ばかりに明け暮れていた俺に勝てるはずもないのだが――、流石に俺も力はセーブする。手加減しながらの喧嘩って結構難しいんだよな……。
ま、それはともかく。
休日には弘司の家に行って一緒にゲームし、喧嘩し、仲直りし、またゲームし、喧嘩して……。
こんな阿呆な繰り返しが、俺の日常の一コマだった。そう、今日この日までは。
今思えば、この後の俺の発言が色々引き金だったんじゃないかと思う。ああ過去の俺よ、余計な事言いやがって。

「これで、三百戦三百勝だな」
「湊仁一朗……卑怯なり。お前の握力は僕の腕を破壊しかねない」
がくりと膝をつき、パソコンが置かれているデスクの隣に配置されたベッドに倒れ込む弘司。
手加減はするが、勝ちは本気で狙いに行くのが俺のポリシーでもある。誰がそう易々と勝利をくれてやるか。
にやりと口の端を意地悪く吊り上げ、俺はうつ伏せに倒れ込んでいる弘司の背中に声をかけた。
「おい、このゲームの主人公はそこそこ喧嘩が強いんじゃないのか？」
「……だから何だよ」
「現実で主人公になれないぞ？」
おそらく俺はにやにやと下卑た笑いを浮かべていることだろう。

元々俺の人相はそう良くない――俺が何か考え事をしていて眉根を寄せている時、近寄ってきた女子が涙目で逃げ出す程度には人相が悪い――ので、おそらく思いっきり悪役の顔なんだろうな。
ベッドに顔を埋めていた弘司は俺の台詞に首だけ動かし、迷うことなくこう言った。
「三次元に興味はないね」
「……清々しいな」
「ああ、『とぅるまい』の世界に入れたら迷うことなくハーレムルート目指すのに……」
「何という不毛な願いだろうか……。ああ、神よこの憐れな子羊を救い給え」
ついにはギャルゲーの世界に入りたがる程までに脳の病状は悪化しているらしい。
早急に治療を施さなければ手遅れになってしまうだろう。最も既に手遅れである感は否めないが。
「ねえジン、ギャルゲーの世界に入ったらさあ……。ジンは今のまま親友でいてくれる？」
「なんだその質問は。まずギャルゲーの世界にゃ入れないだろ」
「仮定の話だよ」
ここまで不毛な仮定はないんじゃなかろうか。
そうは思ったが、弘司の声音は何だかいつもよりも真剣味を帯びている気がしたので、俺は本心からの言葉を告げた。
「……ま、変わんないと思うぜ。お前が女子を侍らせてる姿とか想像できないけどな」
「うっさいな。ジンだって同じだろうに」
「俺はただ悲しい誤解のせいで縁がないだけなんだよッ！　俺はそんなに人相が悪いか、不良に見えるか！？」
「中学時代は立派に不良だったじゃないか……。ていうか目つきが悪いのは自分でも認めるところでしょ？」
「笑顔で肩叩くなよ！　フォローになってないからな！？」

こうして、第二ラウンドのゴングは鳴り響いた。
これで通算成績は三百一戦三百一勝になるんだろうが、それはそれで楽しいから良しとしよう。
こうして俺の休日はつつがなく過ぎて行き――、事件は翌日の朝に起きてしまう。

「……ぅ、朝……、か」
ちゅんちゅん、という小鳥のさえずりと共に、ベッドが面している小窓から暖かな日差しが射し込んできている。柔らかい光に身を委ね、再び微睡みかけたところでがばりと跳ね起きた。
頭が痛い。寝不足だろうか。結局昨日は日を跨ぐまで弘司と遊び、床についたのは起床時間三時間前。普段の半分しか寝ていない計算になるので、不調の原因は明らかだった。
軽く舌打ちを漏らし、部屋を出る。……って、んん？　何か間取りがおかしくないか、この部屋。
ベッドの位置は俺の部屋と大差ないが――、いや、待て、窓の外に見える景色が全然違う。
俺の部屋からは川が見えるはずだったのに、今ここの窓からは川など見えない。住宅地の舗装路が見えるだけだ。
「何が起こってんだ……？」
家が急に空間転移した？　あり得ない。
実は俺に内緒で引っ越しだったとか？　いや、それなら移動してる時に気がつくだろう。
と、なると答えは何なんだ？
「ふぅ……、落ち着け。親に確認してみりゃ良いことじゃないか」
自分を落ち着かせるためにも、声に出して次の行動を決めておく。
よし、準備は出来た。
俺は勢いよく部屋の扉を開けて――。

「あ、おはようお兄ちゃん」
「……さらばだ」
「ちょ、何っ！？　朝から私の顔は見たくないとか、そういう展開！？」

――勢いよく扉を閉めた。

扉を背にぺたりと座り込み、耳を塞ぎながら呪詛のように繰り返す。
俺に妹はいないいないいないいないいないいないいないいないいないいない……。
じゃあ何だ、俺を今『お兄ちゃん』と呼んでいたあの少女は。あの生命体は何だ、エイリアンか、そうなのか！　俺を殺しその皮を剥ぎ仲間に被せ着々とその数を増やし、人類侵略の足がかりにでもするつもりか！　くそっ、そうはさせない！　俺に出来る事なんて少ないが、それでもだ……！
「ちょっとお兄ちゃん！」
「ぐおっ！？」
必死に頭を働かせていたというのに、向こうから勢いよく開かれた扉に背中を押され、思わずつんのめってしまう。扉を開けたのは当然エイリアンだろう。
情けなく床にべたりと張り付くような状態になりながら、俺は声の主であるエイリアンを仰ぎ見た。
「俺を殺す気か……だが人類は屈しないぞ……！」
「はぁ？　何か失礼なことを思われてる気がするんだけど」
「さあやるならやれ！　だが最後まで俺は抵抗するぞ！　人類のためにもな！」
「ちょっと、大丈夫？　おかしくなったの？　お兄ちゃんってば」
「さあ来るなら……うん？」

立ち上がり迎撃の姿勢を取ったところで、俺はこの少女にどこか見覚えがあることに気がついた。
若干くせっ気のある茶色の髪、平らな胸、全体的にちんまいこの少女は、確か――、どこかで――。

『この娘が松原灯里（まつばらあかり）。主人公の一つ下で、親友松原勇次（まつばらゆうじ）の妹なんだよね』
『友人の妹にすら手を出すのか、主人公は』
『彼女のシナリオは親友との友情を確かめることも出来る熱いシナリオでねえ……。相応の難度を誇るんだけど、人気のヒロインの一人だね』
『人の話聞いてないだろお前』
『ちょっと生意気なんだけどそこがまた評価のポイントだよね』

えーと、まさかな？　昨日弘司に紹介されたゲームの登場人物なんて事があり得るのでしょうかね、ははは。
だ、だがすごくよく似ているぞ……。立ち絵の彼女をそのまま立体化させたようだ。当然、かなりの美少女である。
俺は恐る恐る口を開き、彼女に尋ねた。
「えーと、松原灯里サン？」
「ちょっと……本格的に大丈夫なの？　何で兄妹で苗字が違うのよ。湊灯里（みなとあかり）でしょうが」
「……Oh」
ビンゴっぽかった。しかもご丁寧に苗字は俺とイコール、つまり兄妹ってことだ。
なんてことなんだ……。現実を侵食するものだったのか、ギャルゲーとやらは……。
俺がギャルゲーの恐るべき真実に恐れおののいていると、呆れた

ような声が上から降ってきた。
「何かおかしいよ、お兄ちゃん。大丈夫？」
「ああ、大丈夫……。いや、待て、俺の名前がわかるか？」
「湊仁一朗。ねぇ、病院行った方が良いんじゃないの？」
「いや……良い、大丈夫、直った。問題ナシダゼＨＡＨＡＨＡ」
「すごい心配なんだけど」
嘘つきました、問題はありまくりです。
一体俺はどうなってしまったのだろう。
結局流されるままパジャマ姿の灯里と共に階下へ降りた俺は、洗面所で洗顔や歯磨きを済ませた後、居間やそれに面したキッチンの様子を窺った。
確実に俺の家ではなかった。間取りや配置されている家具、何から何まで違う。
キッチンは全く使い込まれておらず、床には俺が幼い頃に包丁でつけた傷がなかった。居間の間取りも違うし、何よりテレビがブラウン管じゃなくて高級そうな薄型テレビだった。
ギャルゲーの現実侵食は生活レベルすら変えるというのだろうか。
「えーと、灯里……さん？」
キッチンで適当に冷蔵庫をまさぐっている妹――と認められるほどまだ割り切れちゃいないが――に尋ねる。
「ん、なにー？　後キモチワルイからさん付けは止めて」
酷い。この妹酷いよ。
「あの……母さんと父さんは？」
「はぁ？　お兄ちゃんやっぱりダメじゃないの？」
「な、何がだ」
「二人とも海外出張で、私たち二人暮らしじゃん」
新事実発覚！　というか大工であるはずの俺の親父が海外赴任とかそれ何の冗談？
……と、いうことは。
ギャルゲーが現実を侵食しているという認識は改める必要が出て

くるのでは無かろうか。
具体的には、その逆なんじゃないか？
つまりは、俺が、ギャルゲーの世界に入り込んでいるのではないか、と……。
「マジか……。でも可能性としては一番高い……」
「何ぶつくさ言ってんの。はいこれ」
「ん……、何だこれ」
灯里から手渡されたのは何の変哲もないヨーグルトだった。
ブランドについては現実世界と代わりが無く、よく見知ったものである。
灯里は「見りゃわかんでしょ」と呟きその包装を開け、一気にその胃へと流し込んだ。
「はい、朝食摂取完了」
「ちょっと待てええええい！」
「な、何よ。何か今日のお兄ちゃん変だよ。本格的に。いつも変だけどその数倍上だね」
「今のが朝食だなんて俺は認めん、断じて認めんぞ……！」
「こ、怖っ、顔怖いんだからそんな鬼気迫る表情で近づかないでよ」
俺は幼い頃から掃除に洗濯、料理とありとあらゆる家事技能を仕込まれてきた超家庭派ボーイなのだ。家でも家事のほぼ全てを一手に引き受ける俺にとって、あのヨーグルト一個が朝食だなんて事は認めるわけにはいかなかった。これは許せざる事、湊家の食を司る俺にとっては絶対に譲れるものではない。
俺の突然の変貌に呆然としている灯里を尻目に俺は大股でキッチンへと向かい、冷蔵庫の中身を確かめた。野菜室には買ったきりで使われていないと思わしき野菜の数々。チルド室にはパックに入った豚肉がある。賞味期限を見れば、ギリギリでセーフのようだ。
手早く済ませられる野菜炒めを作ることに決め、俺は他に何か使えるものがないか、冷蔵庫を隅々までチェックした。幸い、レンジで温めるだけで二人分の白米になる『スズキのごはん』があったの

で、若干悔しいがこれを使うことにする。今日の夕飯からは自炊だ。絶対だ。
粉末の味噌汁二人分もすぐ脇の戸棚から見つけ出したので、ヤカン、フライパン、まな板、包丁などを足元の引き戸から取り出し水で濯いでいく。
「ちょ、お兄ちゃん、料理できたっけ？　私と同じで壊滅的な腕前だったはずじゃ……」
「俺を舐めるなよ……って、何？　料理が下手なのか、俺は？」
「何で自分の料理の腕前を忘れてんのよ。私もお兄ちゃんも料理作ったらいつも黒こげだから、うちのご飯っていつもレトルトとか店屋物じゃない」
呆れたように灯里は言うが、俺にとっては初めて聞かされるようなことが殆どだ。
しかし、その言葉から推測できる事柄がいくつかあった。
一つは、彼女の記憶にある俺と今の俺は別人であるということ。もしかするとそれは、俺がゲームの世界に飛び込んできてしまったという仮説の裏付けになるかもしれない。
元存在していた灯里の兄『松原勇次』に、俺という存在が上書きされたとすれば――、一応の辻褄は合う。
俺が灯里のことを知るわけはなく、灯里が俺を見て首を傾げるのだって合点がいく。彼女が認識しているのはあくまでも彼女が今まで接してきた『兄』であり、その『兄』の記憶を持たない俺が彼女の予想する『兄』と異なる言動を取るのは当然のこと。彼女からの認識は『兄』のまま変わらず、おかしな言動ばかりを取る俺を見て彼女が混乱するのも無理はないということになる。
だが、それだけで「はいそうですか、僕はギャルゲーの世界へ入り込んだみたいです」などと認めるわけにもいかない。そもそも非現実的すぎる。弘司なら泣いて喜ぶだろうが、俺にとってはただただ混乱するばかりで――。
「弘司……。そうだ、弘司はいないのか？」

とんとんと慣れた手つきで野菜を刻みつつ頭の中でさまざまな推論を並べ立てていた俺は、自らを取り巻く環境の激変で今まで頭から閉め出していた親友の顔を脳裏に思い浮かべた。
ここがヤツのおすすめギャルゲーの世界だというのなら、呼び出されて然るべきはあっちの方じゃないのか？
何故俺が呼び出されなければならないんだクソッタレめ……。
野菜を弘司の呑気な顔に見立ててグサリグサリと刻んでいく。完全に八つ当たりだが、今くらいは許して欲しい。
と、そこで俺の呟きを聞いていたのか、灯里が居間の方から声をかけてきた。
「弘司先輩がどうかしたの？」
「え？　弘司がいるのか？」
「はぁ？　いつも一緒にいるのに何言ってんのよ。お兄ちゃんもしかして若年性アルツハイマー……」
「いや、違う。そうか……。いるのか、弘司のヤツ。くく、ははははッ！」
俺は弘司に出会ったらとりあえず殴ることに決めた。灯里の口調から考えるに同じ学校のようだし、見つけることはそう難しくないだろう。潰す潰す。くふふふ。
いやあ、ストレス解消の予定が出来て実に良かった。俺は鼻歌交じりで朝食準備に取りかかる。

……居間から投げかけられる灯里の視線が冷たかったのはどうしてだろうか。

「え、これお兄ちゃんが作ったの？」
「ん？　おかしいか？」

豚肉入りのスタミナ野菜炒めと、スズキのごはん、そして味噌汁。質素かつ半分以上がインスタントという、俺にとっては屈辱以外の何物でもないラインナップなのだが、正面に座る灯里はそう思っていないらしい。

野菜炒めと俺の顔を交互に見て、「すご……」と呟いては感嘆のため息を漏らしている。こんなの文字通り朝飯前、というか簡単すぎて笑ってしまうレベルだが。

「じゃ、早速頂きまーす」

「ああ、召し上がれ」

「ん……。あ、美味しい。すごっ、まともに食べられるものだよお兄ちゃん！」

「当たり前だろ……」

この少女は一体今までどんなものを食べて生きてきたのだろう。今までの彼女の食生活に思いを馳せ、俺は目頭を拭った。

灯里は本当に美味しいと思ってくれているらしく、すごい勢いで箸を進めていた。見る見るうちに野菜炒めの量が減っていく。やはり料理を作るものにとって、作ったものを美味しいと言って食べて貰えるほど幸せなことはないな、うん。

俺もスズキのごはんに手をつけ……、って野菜炒めが消失している！？　俺まだ手をつけてないのに！

「あ、ごめんお兄ちゃん。あまりにも美味しいから全部食べちゃった」

「……ああ、そう……ですか……」

「ってもうこんな時間じゃん。美味しい朝ご飯ありがとね。後、早くしないと遅刻するよ。じゃっ」

「へ？」

そう言って、灯里はどたどたと二階へ駆けていった。制服に着替えて登校するのだろう。いや、それは俺もか。

見れば、壁に掛かっている時計は長針が3を指している。たしかゲーム中のテキストでは、八時半が登校時間だったはず。時間に余

裕はなさそうだ。
「俺も急ぐか」
灯里の使った皿と自分の皿をシンクまで運び、軽く水洗い。若干心苦しいが本格的な皿洗いは帰宅後だ。
そのまま二階へ足を向けると、階段で制服に着替え終えた灯里とはちあった。この制服、間違いない。あのギャルゲーで主人公達の通う『三森坂学園』の制服だ。男子は変哲のないモスグリーンのブレザーであるのに対し、女子は赤を基調とした妙に前衛的なデザインのセーラーだったのを覚えている。
「お先ー」
「いってら」
軽く会話を交わし、俺は目的地の自分の部屋へ。……なんかすごい馴染んでるな俺。
部屋に入り、クローゼットに仕舞ってある制服を数秒で着終え――ネクタイの結び方がわからなかったので適当に着崩した――、床に放置されていた鞄を手に取り階下へ向かう。
下駄箱の上に置いてある小物入れに家の鍵が入っているのを見つけたので、手に取り外へ出た。
鍵を閉め……いざ学校へ……。
「って、俺学校の位置知らないぞ！？」
いや待て。そもそも学校へ行く必要はあるのか？
自分の身に降りかかったこの不可思議な現象の解明を急ぐべきなんじゃないか？
逡巡を始めた俺だったが、すぐにそれを妨げる声が耳に届いた。
「ジンー」
聞き覚えのある、呑気な声。
「やっぱジンだ！　ジンー！」
「おお、おお……弘司ッ！」
振り向けば、見知った顔。呑気そうな顔を見せこちらへ駆け寄ってくるのは、俺と同じくモスグリーンのブレザーに身を包んだ親友

春野弘司だった。その傍らには、同じくゲームで見覚えがある少女……。

名前は確か、日比野咲良（ひびの さくら）がいた。

あの野郎、朝から一緒に登校か。女子と。クソが。

待て、落ち着け、俺。冷静に一回深呼吸し、俺は弘司を見た。随分と嬉しそうだ。

きっとあいつは、訳のわからない状況に混乱していたはずだ。だから俺の存在に心から安堵し――、

「夢が叶ったよ！　咲良たんが幼馴染みになってた！」

――ああ、そうか。俺もまた笑顔で弘司の元へと駆け寄り、

「歯ァ食いしばれ！」

拳骨を一発お見舞いしてやった。

完全に八つ当たりだがこいつの幸せそうな顔を見てるとどうもドス黒い感情が胸の奥から湧き上がってくるのだ。許せ弘司。

００１：親友、飛ばされる？（後書き）

お読み下さってありがとうございます。
ありがちな設定ですが、のんびり続けていきたいと思っているので
宜しくお願いします

００２：バカと親友

「で、今俺たちが念頭に置いておくべき事は何だ？」
「咲良たんとのフラグ立て」
「俺は優しいからもう一度チャンスをやろう。俺たちが一番気にすべき事は何だ」
「咲良たん攻略後のハーレムルート突入フラグの準備」
「俺は温厚だからな。もう一度聞くが俺たちが絶対に気にしておかねばならないことは何だ」
「ハーレムルート突入後における全員の好感度調整」
「……。よし、これが最後だと思えよ。俺たちが何が何でも気にすべき事項は何だ」
「精力剤とゴムの用意」
「このゲーム全年齢対象だろ」
どうやら俺の思っていた以上に春野弘司という男は馬鹿だったらしい。これ以上俺は堪えきれず、勢いよく弘司（バカ）の顔面を殴っていた。
「いたいんだけど」
「人の話を聞かないからだ」
弘司との再開を果たした後、勝手の知らない三森坂学園に登校して初めての昼休み。俺は弘司と顔を突き合わせて、購買で買ってきたパンを食べつつこれからのことについて話し合っていた。
午前中、俺は休み時間が来る事に弘司を廊下へ呼び出し、自分たちの置かれている状況について考え得る限りの推論を並べ立てた。そして推論を立てる上で重要な情報を握る弘司曰く、この世界は何から何まで『とぅるまい』の世界と同じらしい。ゲームのテキストで説明される主人公の家の間取りや、朝起こしに来る幼馴染みの存在、仕草、何から何までがゲームそのままだという。クラスの皆の反応から、弘司がゲームの主人公、俺がその親友ポジションに着いているのも間違いないようである。

ということは、やはり俺たちはゲームの世界に入り込んでしまったと見るのが妥当なところだろう。あまり認めたくはないが。
ちなみに、弘司は俺の想像通り泣いて喜んでいた。「咲良たんが、霧子さんが、灯里ちゃんも！　うおおおおお！」などと見苦しく叫んでいたのでとりあえず腹に一撃を入れてやったらすぐに黙ったけども。
「俺たちが気にすべきはこれからどうやって元の世界に戻るのか、だろうが」
「や、やめてよジン、そんな顔で迫らないでよ怖い」
「至って普通の顔だボケ」
若干涙目になってまで言われると俺としては非常に傷付く。
「ああもうともかくだな。俺もお前も元の世界に戻るために何らかの手がかりを探してだな――」
「え、ジンは元の世界に帰りたいの？」
「いや、当たり前だろ。ワケのわからん世界に好き好んで居たいと言うヤツはいないと思うぞ。何よりあっちで親父達が心配してるかもしれないし」
俺がギャルゲーの世界に飛ばされているとすれば、元の世界にいた俺は忽然と姿を消していることだろう。家族達にあまり心配はかけたくないし、まだ色々と心残りが多すぎる。俺としてはとっとと帰還したいところだったのだが、目の前のこの男はどうもそういう様子ではなさそうだ。
顎に手を当て思案顔を見せた弘司は、若干の間を置いた後に躊躇いなく言い放った。
「……僕は帰りたくないなあ」
「はぁ？」
思わず間の抜けた声を上げてしまった。何を言っているんだこの男。
こいつにだって家族はいるだろうし、少ないが友人もいる（この趣味のせいで友人の数が少なかったりするが）。そんな奴らの存在

を厭わないのか、こいつは。
「だってここは僕のパラダイスなんだよ！？　幼馴染みに咲良たんがいて、麗しの霧子さんがいて、生意気だけど可愛らしい灯里ちゃんがいる！　どうしてここから帰る理由があろうか！　いや、ないね！」
「言い切りやがったこいつ……」
流石は馬鹿だった。堂々と言い切った弘司の姿に、俺は嘆息する他無かった。
やれやれ……。こりゃ俺が一人で現実世界への帰還の手がかりを探す必要がありそうだな……。
「ジンの言いたいこともわかるよ。家族とか、友達とか、向こうにも大事な人がいる。かけがえのないものもね」
「……わかってんなら、なんで」
「でも！　ずっと恋い焦がれていた少女達を、こうして自分の目で、見て、触れて、言葉を交わせる！　想いを、通わせあうことだって不可能じゃない！　これだって十分、かけがえのないものなんじゃないかなっ！？」
ぐっと拳を握りしめて力説する弘司の姿は、今までにないほどに輝いて見えた。馬鹿だけど。言ってることすごく馬鹿らしい気がするけど。
俺は曖昧な――だが諦めを滲ませた――笑みを浮かべ、昼食のサンドイッチを頬張った。
飛ばされたのはゲーム内の世界だが、弘司の言う通り物に触れるし、味も感じる。いやまあそれは朝食の時点で実証済みだが、この世界にある物は殆ど現実世界と大差はない。ただ違うのは、住んでいる家と通っている学校と人々の顔ぶれだけだ。
「……やれやれ、参った。随分でかい差だ」
「なに悩んでんのさ。らしくない」
苦笑混じりのハスキーボイスが耳に入った。
「ん……お前は確か、倉橋辰美（くらはし たつみ）だったか……？」

ぐてーっ、と椅子の後ろに仰け反ると、ちょうどこちらへと歩いてきた女子が反転して目に入る。
短く揃えられた髪と、すらっとしていて高く、よく引き締まった身体、中性的な顔立ちが印象的なこの少女は、倉橋辰美。
共通ルートで幾度か会話を交わすことがあると弘司が言っていた。ちなみに彼女曰く俺とはよく話す仲だそうだ。
というのも、彼女の記憶にある俺は『松原勇次』という『とぅるまい』の主人公の親友ポジションにある男であり、俺『湊仁一朗』は『松原勇次』という名前に上書きがなされただけの存在だと思われるからだ。皆は『松原勇次』の名前以外の情報を引き継いで、それに『湊仁一朗』の名前を組み合わせた新しい記憶を形成している形になっているようだ。それは弘司についても同様で、ヤツも『鈴木秋也』を『春野弘司』という存在で上書きしていた。
そしてそれ故に、俺は彼女についての情報を全く持っていなかった。
同時に、彼女の記憶にある俺に関する情報と、現在の状態には齟齬が生じてしまうのだった。なんせ皆の記憶にあるのは『松原勇次』のデータであって今の俺とは別人の物だからな……。
「湊、まさかアンタに今更フルネームで呼ばれるなんて思いもしなかったよ。いつも名前で呼んでたはずじゃないか」
「あー……、そうだったか」
これが倉橋辰美が俺に関して持っている情報と、俺の現在状態の間に生じている齟齬だ。
女子を名前で呼ぶというのは初体験だが、怪しまれるわけにはいかない。俺は羞恥心を押し殺し、震える声で名前を呼んだ。
「……た、辰美。何か用か？」
「……本格的におかしいね。アンタはいつも倉橋って苗字で呼んでたよ」
謀られた。
俺がこれ以上のボロを見せるわけにも行かないと、倉橋との会話

を続行するか考えあぐねている間に、弘司の方は随分親しげに彼女に話しかけていた。
「倉橋さん、ジンの頭の中は空っぽだから仕方ないんだよ」
「ああ、そうか……。空っぽだもんねぇ」
「うん、まさか友人の呼び方すら忘れるなんてね……」
俺に注がれる生暖かい視線が二つ。くそっ、こいつら……。初対面だから倉橋に関しては怒りの感情を抱きはしないが、勝手知れたる弘司は別だ。とりあえずぶん殴っておいた。
どうも弘司に暴力を振るう回数が増えている気がするがまあいいか。
「で、何かあったのかい？　辰美お姉様に相談してごらんよ」
「何もないです」
「嘘だね」
一発で見抜かれた。俺はポーカーフェイスだと自負していたのだがそうではなかったのか？
「この一連の流れで、何か隠してるってのは疑う余地がないだろうに……」
「そんな呆れ果てたような目で俺を見るなっ！」
「ジンってば……」
「お前もだ弘司」
弘司を殴る。くそっ、周りは知らない相手だらけだというのに相手は自分を知っているというこの環境、激しく居心地が悪い！
憂さ晴らしに弘司に十七連撃でも喰らわせてやろうかと考えていたら、弘司の背後からまた一人姿を現した少女がいた。
「弘司くんも湊くんも辰美ちゃんもいるんだ。ちょうど良かった」
笑顔を見せながらやってきたのは、朝一緒に登校してきた日比野咲良だった。『とぅるまい』のメインヒロインで、弘司の超おすすめ物件。主人公の幼馴染みで、世話焼きな性格、明るく友人が多くて皆の人気者と――、全く捻ったところのないオーソドックスな設定を持つ女だが、弘司曰く「その奇を衒わない至って普通の設定が

逆に目の肥えたユーザー達の心を掴んで離さないんだよ！」だそうである。毎日の日課は、朝に家が隣同士の関係にある主人公――つまりは弘司――を起こしに行くことだという。この時点で俺には現実味を感じられないのだがどうだろうか。当然弘司は殺したいほど妬ましいけど。女子が起こしに来てくれるというのはいつになっても男子の憧れだ。

ちなみに外見はゲームから飛び出してきただけあって――もとい、ゲームの登場人物だけあってしっかり整っている。色素の薄い髪を肩を越えるあたりまで伸ばしており――その一本一本がさらさらだった――、スタイルは抜群とは言わないが、ちゃんと自己主張を忘れていない胸を持つなかなかの体型だ。

余談だが、彼女には前衛的なデザインの学園指定セーラー服が非常に似合っているのに対し倉橋は壊滅的なまでに似合っていなかった。

「……素材の違いか」

「何か失礼なことを考えたねアンタ」

バレてた。顔が悪いわけではなく純粋にスタイルの問題なんだが。

「次なんか変なこと考えたら殺すよ」

「すまん……」

底冷えのする声で倉橋が言った。目がマジだ。

日比野はそんな俺たちのやりとりを笑顔で見やった後、手に握る何かを掲げた。弁当箱、か？　可愛らしいナプキンに包まれたそれは、しかしどうも妙な染み（紫色）を作っている。何だあれ……。

「三人とも、お昼はもう食べちゃった？　もし良かったら――」

首を傾げ尋ねてくる日比野。弘司は彼女の一挙一動に目を奪われていて――ホントに好きなんだな、と少し感心するがあそこまで凝視しているのではただの変態だ――、倉橋がじり、と後ずさるのには気付いていないようだった。

そこで、俺も思い当たる。

『咲良たんはさ、料理ベタなんだよね。料理ベタって設定はやっぱシンプルだけど良いよね』
『料理が出来るに越したことはないだろ』
『わかってないな。下手なりに愛が籠もってるんだよ、愛がさあ！』
『でもその料理食った主人公、悶絶してないか？』
『……ま、愛さえあれば大丈夫なんだよ』
『昇天しかけてるけど』
『愛が足りないんだよ主人公』

今こそお前の愛を見せる時だぞ春野弘司。俺は心の底からお前を応援しているぞ……。
何だか腐卵臭だとか刺激臭だとかが漂ってきているのは気のせいに違いない。きっと気のせいだ。視界が歪むのもきっと。気のせい……なわけあるか！　あんなもん食わされた死ぬ！
だから弘司。俺はお前を囮にしてとりあえず逃げるぜっ☆
生きていたらまた会おうっ☆
「さあ倉橋……逃げようぜっ☆」
小声で倉橋に合図っ☆
「ああ、ダメだ、湊が狂った……。酷い、酷すぎるよ、日比野――」
「何を言ってるんだよ倉橋っ☆」
あ、やばい……何かダメな気がするぜっ☆
語尾のこの余計なアクセントってもしかして副作用なんですかねっ☆
とりあえず倉橋と一緒に教室の外へっ☆
「あの、咲良……？　これは……」
「料理だよ？　遠慮しないで食べてね、弘司くん。作り過ぎちゃったから……」

「いや、あの……えーと……ジンも倉橋さんも一緒に……」
「でも二人ともいないし、それより私は……弘司くんに食べて欲しいなあって……」
「僕を売って逃げたなあああああああっ！？」
弘司の叫び声が廊下にまで響いてきたが気にしたら負けだっ☆

結局日比野の料理を全て食べたらしい弘司は午後の授業中起き上がる気配を全く見せなかった。
そして、日比野の料理のせいで俺の語尾にこびりついてしまった妙なアクセントは放課後まで直らなかったぜっ☆　……違う！　直らなかった。

「酷い目にあった」
「お互い様だ」
「ジンは直接口にしてないから良いじゃないか。僕はあれを全部食べたせいで生死の境を彷徨ったよ」
「俺は社会的な生死を彷徨ったがな。語尾のせいで」
放課後、俺と弘司は二人して教室で駄弁っていた。教室に他の生徒達は残っていなかったので、気兼ねなく俺たち自身についての深い話を展開することも出来る。
二人並んで窓際からグラウンドやテニスコートで部活に興じる生徒達の姿を目で追いつつ、俺は差し込み始めた夕陽にその目を細めた。
弘司を生贄に日比野の料理を回避した後、どうやらずっと笑いを堪えていた倉橋の堤防が決壊、彼女は爆笑しすぎて腹痛を引き起こしてしまった。腹を押さえる彼女を保健室に連れて行って、養護教諭に彼女の腹痛の原因を伝えた時の辛さと言ったら、軽くトラウマ

になりかけるレベルだった。ずっと噴き出しそうになっていた養護教諭の顔を俺は忘れない。
　もう金輪際日比野の料理には近づかないことを誓おう。口に入れたら最後、今日よりも強烈なダメージを受けることに違いないからな……。
「……それでジン、どうだった？」
「はい？」
「今日一日、楽しかった？」
「はぁ？　急に何を言ってるんだよ」
　急な話題の転換に俺は眉を顰めた。何が言いたいんだこいつ。
「僕にはこの世界が本当にゲームの世界だなんて思えないよ」
「いや、登場人物みんなゲームのキャラだろ」
「……僕は、この世界が現実であって欲しい。いや、もう僕にとってこの世界は現実だ」
　俺の呟きを無視し、弘司が言った。
　昨日も聞いた気がする、真剣な語調で。
「聞いたよね、昨日。もしギャルゲーの世界には入れたらって」
「ああ……聞いた」
「僕は、やっぱりジンに親友でいてもらいたい」
　こちらをしっかりと見据え、弘司が言う。その瞳は真摯な輝きを放っていて、俺は視線を逸らすことができなかった、
「この世界で、ジンと親友でいて、そのまま暮らしていきたい」
「弘司、お前……」
「ジンが元の世界に戻りたいって気持ちもよくわかるし、僕にだって色々大事なものが向こうにあることは変わりない。けど、僕はこの世界で生きていたい。だって僕の夢だったんだから……」
「……」
「僕の言ってることはすごく我が儘なことだろうけど、言わせてくれ。仮に元の世界に戻れる手段があったとしても、僕はこの世界に残る。そして出来るなら、君も一緒にいて欲しい。僕にとっての親

友は、ジン、君しかいないから」
弘司の言葉に、俺は言葉を返すことが出来ずただただ黙っていることしかできなかった。
沈黙を肯定と取ったのかは知らないが、弘司は何かすっきりしたような笑顔を浮かべ、窓に背を向けた。自分の席まで歩いていき、鞄を手に取った後口を開く。
「さ、帰ろう」
「……」
「ジン？」
言いたいことは纏まっていないが、俺もこの馬鹿にここまで言われて黙っているような男ではない。
だから毅然とヤツに向き直り、言ってやった。
「弘司。俺は元の世界へ帰るのを諦めはしない。手段を見つけたら、首根っこ引っ掴んででもお前を元の世界へ連れ戻す」
「ジン……」
「ここはあくまで仮想の世界だろ？　俺たちが存在できる時点できっと何かがおかしいんだよ」
「でも何も問題なんて起こってないじゃないか」
「今はそうかも知れないが、いずれどうなるかはわからないだろ？　お前に危害が加わるのを見過ごすわけにはいかないんだよ。……親友としてな」
そう、一番親しい友人として、こいつに何か不幸が降りかかってしまうのなら、その不幸を取り除いてやらなくちゃならない。そう、不幸は取り除いてやるさ。
中学時代に受けた恩を、我ながら随分引き摺っているのだなあとは思うが、それでもだ。
「だから、まあ……、元の世界に戻れるまでは好きに過ごすと良いさ」
「……ジン……。……手がかり、見つけないでくれることを願ってるよ。願わくば失敗しろ」

「ああ、そうか。じゃあ俺もお前の恋路を精一杯邪魔してやるよ。お前が幸せになるのを黙って見過ごすわけにはいかないんだ。親友としてな」
「本音が漏れ出たなジン！」
「お前、俺と一緒に喪男同盟組んでたじゃないか、なあ？　幼馴染みが出来た瞬間に裏切りか？」
「くっ、近寄るな非リア充が！　臭いが移る！　僕は、僕は必ずハーレムルートに突入して酒池肉林の宴を楽しむんだよッ！」
「お前こそ本音が漏れ出てきやがったな弘司ッ！　テメェ、俺の目が黒いうちは貴様に幸福が訪れることはないと思えよ！」
「くそっ、何が何でもハーレムルートまっしぐらだ！　邪魔はさせない！　というわけで早速咲良たんと帰宅してフラグを立てる！」
「そうはさせるか！　何が何でもお前は俺と一緒に帰宅だ……！
くはははは！」
「うわ、邪悪！　邪悪な笑い顔！　邪神降臨！」
「誰が邪神だコラ！」

ま、最終的には。
たとえゲームの世界に飛ばされていようと何だろうと、俺たち二人の関係はそう簡単に変わりはしないって事らしい。

「あの、二人とも荒い息で組み合って……何をやってるのかな？」
「日比野っ！？」「咲良っ！？」
「……もしかして、そういう関係……」
「「断じて違います」」
色々大変そうだな……この生活。

００２：バカと親友（後書き）

二話目です。
早速お気に入り登録して下さった方がいらっしゃるようで嬉しい限りです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0764q/

親友だってラクじゃない

2011年1月10日13時10分発行